UIFA JAPON NEWSLETTER

No.70 Feb. 25, 2007

■主な内容

・第 39 回海外交流の会報告
　　陶器の街・スウェーデン・グスターブスベリの歴史・再生・保存
・IAWA アドヴァイザー会議報告
・特集：会員の仕事－持続可能な環境づくりへの取り組み－
　－エネルギーのメジャーを持ち歩く
　－団地再生におけるコミュニティの重要性
　－身近な生活環境デザイン
　－日下部記念病院見学記
・この指止まれ－小笠原伯爵邸見学記
・災害復興見守りチーム定期報告
・ＵＩＦＡ会員の本－１－「スウェーデン　陶器の町の歩み」
・ＵＩＦＡ会員の本－２－「アルバムの家」
・役員会報告

左）海外交流の会スウェーデン大使館オーディトリウム
右）同上ギャラリーでの談笑風景

第 39 回海外交流の会報告

「陶器の街・スウェーデン・グスターブスベリの歴史・保存・再生」に参加して

在塚　礼子

■ 陶芸家と建築家のコラボ

2006 年 12 月 9 日(土)、雨の中、スウェーデン大使館のオーディトリウムを満員にして、標記の会が開催されました。話題の中心は、ストックホルム近郊の美しい多島海に位置するグスターブスベリ。18 世紀半ばに館を構えたグスターブ氏に由来する名を持つ、歴史ある陶器の街です。

藤井恵美氏と小川信子会長

陶芸家　藤井恵美氏は、40 年前、初めてこの町に住んだ時から、小さな心地よい住まいに大切な何かを感じ取り、それを成立させているものについて考えてこられました。小川信子会長は、この国の福祉文化に惹きつけられ、藤井氏と出会い、20 年前にこの町に強い印象を持ちました。その後、歴史と自然を生かした見事な再生ぶりに接したお二人は、資料収集、観察、ヒヤリングに幾度も現地を訪ねてその経緯を探り、その成果を『スウェーデン陶器の町の歩み』（ドメス出版）に結実させたのでした。

■ 街の歴史と再生

館を建設するためのレンガ工場が 19 世紀に陶器工場に再生されて以来、オーナーから協同組合連合へと担い手を変えながら、働く人々のための住まい・まちづくりが優れた陶器の生産を支え、陶磁器文化を広め、町を発展させてきました。70 年代に国際競争の中で一時衰退した町は、80 年代に入り町村合併と民活化も味方につけて、小さな区域ごと、建物ごとに、歴史を生かし、生活、福祉、環境の視点に立つ保存・再生計画を進め、新たな魅力と活気を獲得しています。荒れ果てていた古い館がシニアハウスとして再生されたことはその象徴でしょう。

このような人々の営みの長い蓄積が「胎内から天国まで」人権を守り、政策の基本に住宅を置くスウェーデン文化を培っていたのでした。参加者はお二人のコラボレーションの結晶をプレゼントされました。大使館ギャラリーでの藤井恵美在端 40 年記念展。グスターブスベリの深い海の色を湛えた作品展もまた、少し早めのクリスマスプレゼントでした。

「北欧印象」
藤井恵美作

IAWA アドヴァイザー会議報告

次の３年もアドヴァイザーを続けることになりました

松川　淳子

■ 設立 25 周年に向けての課題

2006 年 10 月 13 日から開催された IAWA のアドヴァイザー年次総会に参加しました。2002 年からアドヴァイザーを務めるようになった私は、3 年の任期が終ったところで再選され、これで 4 回目の参加となりました。例年どおり、ワーキングミーティング、ブラックスバーグのヒストリカル・ツアー、総会、全員のパーティー、ランチ等盛りだくさんの行事に大忙しの、楽しい、充実した 4 日間となりました。

新しい運営体制に大きな変化はなく、議長にドナ・デュネイ(重任)、事務局に前々議長のマルシア、財務にニューズレターを担当してきたケイ、ニューズレター担当にアーキヴィストのゲイルということに決まりました。

2010 年に設立 25 周年を迎えるアーカイヴにとっては、大学との関係のあり方、資金の調達、事業のあり方など、問題は山積しているのですが、なかなか一度に解決できるものでもなく、引き続き考えていくしかないものばかりでした。

■ 学外アドヴァイザーによるセミナー

最終日に行なわれた学外アドヴァイザーたちによる、工科大学の学生と先生に対してのセミナーも大変面白いものでした。フランク・ロイド・ライトのタリアセンウエストで働いたルイス・ゴットリープさんの「タリアセンで働く」、モンゴルのサラ・サラントサットラルさんの「モンゴル建築の歴史的考察」、SOM で働き、その後独立したシカゴのクリスティン・ファロンさんの「建築のためのデジタルアーカイヴ」、私の「法末プロジェクトの紹介―被災からのコミュニティの再建」というプログラムでしたが、それぞれスライドやパワーポイントなど豊富な映像を駆使して、仕事の体験からの話を熱っぽく語り、集まった学生、教授陣約 100 名に盛んな拍手を浴びました。デュネイ先生の講義に参加させてもらい、学生たちと話したのも刺激的な面白い経験でした。

スペシャルコレクションと
アドヴァイザーたち

デュネイ先生の指導する
課題に取組む学生たち

エネルギーのメジャーを持ち歩く

寺尾 信子

■ JIA 環境データシート

建築関連５団体（註１）は、持続可能な循環型社会の実現に向かって連携して取り組むことを宣言し､2000年６月に｢地球環境・建築憲章｣を制定しました。日本建築家協会（JIA）は、2000年から「環境建築賞」を設け、毎年優れた環境建築を顕彰しています。同憲章における５つのテーマ｢長寿命｣「自然共生｣「省エネルギー」「省資源・循環｣「継承」の中で「省エネ」は最重要項目であるため、賞の応募者は｢JIA 環境データシート」の提出も求められています。

私は、2002年から JIA 環境行動委員会委員となり、同シートの開発を担当しています。｢環境」「エコ」という言葉が巷に溢れている今日ですが、それらを使う人の数だけ、意味の深さや取組みの姿勢があると感じています。言葉だけが上滑りしていて、実態は暗澹たるものです。CO2 排出量は、家庭部門では増加の一途です。（註２）自分の体重を知らずにダイエットに取組む人はいません｡同様にエネルギー･ダイエットでは「エネルギー消費量」を知ることが始めの一歩です。これを把握している意匠設計者が殆どいないため、簡易算出ツールとして JIA 環境データシートは開発されました。

■ 住まいの身体測定

ご自宅や設計作品について、１年に１度で良いので「住まいの身体測定」をしてみて下さい。いくつかの「換算係数」を知っていれば､電卓でも計算できますが､このツールの便利なところは､光熱用水費の領収書を片手に「エネルギー使用量｣､「エネルギーコスト｣､「延床面積」を入力すると、自動的にグラフが作成されることです。グラフには、Ⅳ地域（註３）において、目安とすべき４種類の値（図１）が中央に記されています。

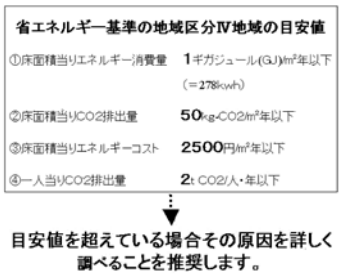


図1: 4つの指標と目安値

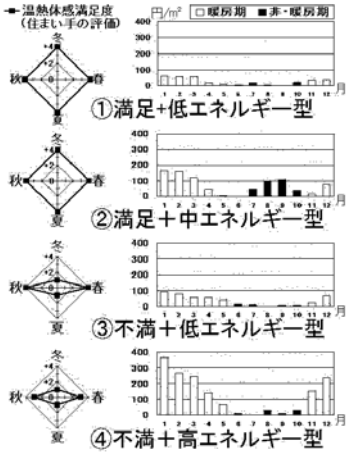


図2: 4つの類型を代表する事例

上記は「胴回り測定用巻尺（tape measure)」のイメージですが､「体重測定」も必要なので、体重計（bathroom scales）も用意されています｡「体重測定」では、簡易推定法により、暖房・冷房エネルギー消費量が算出されます。

少なければ優良、ということではなく､「室内環境についての住まい手の満足度」と関連づけて、暖房・冷房エネルギー消費量の大小を評価しています。また、特徴のある代表事例を参考として紹介しています。（図２）果たして、ご自宅のエネルギー消費の特徴はどれに最も近くなるでしょうか。

このツールは、４年間、約30世帯の調査を経て考案されたものですが、研究の過程で CO2 排出量削減対策として、かなり明確な方向性を見出すことができました。それは住まいづくりに際して、その土地の特徴を読み、可能な限り自然エネルギーを活用することが必須だということです。また、住まいの運用エネルギー消費量の削減ばかりでなく、LCCO2（ライフサイクル CO2）排出量の削減の研究が重要であるということです。

皆様は「寸法のメジャー」はスケール感として体得しておられるので、是非2007年は、エネルギー・メジャー元年としていただきますことを期待しています。

＜註１＞日本建築学会・日本建築士会連合会・日本建築士事務所協会連合会・日本建築家協会・建築業協会。何れも社団法人。

＜註２＞温室効果ガスで大きな割合を占める「エネルギー起源二酸化炭素排出量」において、家庭部門は、京都議定書基準年1990年度１億2700万ﾄﾝ-CO2 に対し、2005年度環境省速報値１億7500万ﾄﾝ-CO2 と 37.4%増。産業部門や運輸部門では横ばいまたは減少傾向であるのに対し、家庭では増加の一途。

＜註３＞主として関東地方以西、蒸暑気候が特徴で、約８割の国民が居住している地域（省エネルギー法における地域区分)。

団地再生におけるコミュニティの重要性

牛山 美緒

■ 地域を地域で支えつづけるために

UR 賃貸（旧公団）住宅団地では、年々少子高齢化が進んでおり、ひとり暮らしも増え、安心して住み続けることのできる環境づくりが求められている。昭和30～40年代に建設された団地では、長年培われた豊かなコミュニティがあり、入居当初から子育てを通して助け合ってきた今60～70代の人たちが、団地のこれからを心配し、自分たちで何とかしなくてはという思いで、地域活動をがんばっているところも多い。それらの世代は、高齢者の問題だけでなく、若い子育て世代をどう支えるかにも関心が高く、幼児教室や朝ご飯を抜かないようになどの子育て指導の話し会など行っている団地もある。活動としては、多世代交流や高齢者の孤独の解消のための「ふれあい喫茶（コミュニティカフェ)｣､「高齢者等の食事会｣､家事の手伝いなどの「助け合いの会｣､孤独死を防止するための「安否の確認」､「子育てサロン」などさまざまな事例が見られる。

■「気軽に立ち寄れるサロンのような場」づくり

建替団地では、建替前に同じ住棟だった友人たちと話す機会がなくなり寂しく思っていた人たちが､「ふれあい喫茶」が開催されることで、誘い合わせて５～６人で集まったりして、交流できる場ができたことを喜んでいる。ふれあい喫茶は集会所や空き施設などを使って行われているが、コーヒーや紅茶が100円程度、ちょっとしたお菓子付の場合や軽食を出しているところもある。高齢になってから転居してくる方も多いが、団地で高齢者食事会やミニデイケアの活動があったからこそ、地域の人と顔見知りになれたという声も聞く。閉じこもりがちの現代の暮らしの中で、ボランティアのスタッフと会話を交わせる場、地域の人と知り合うきっかけの場として有効な役割を果たしているようだ。

写真　集会所でのふれあい喫茶（小平団地）

調査でも何らかの地域のつきあいを求めていることが明らかになっており、「いつでも気軽に立ち寄れるサロンのようなスペース」の利用意向は３人に２人の割合で見られる。

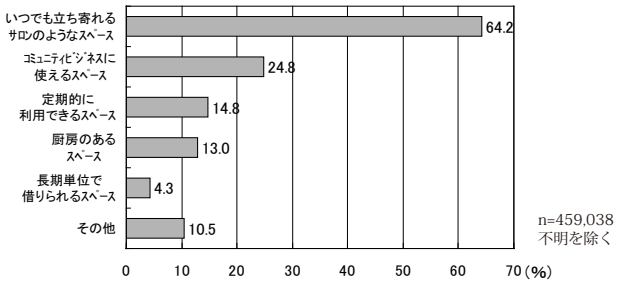


図　利用したいと思う団地内施設　（複数回答）
「平成17年 UR 賃貸住宅居住者定期調査」より

■ 都市再生機構の取り組み

近年、機構では住宅内部のリニューアルだけでなく、団地全体の「団地再生」に取り組み始めているが、ハード的な建物改修にとどまらず、既存住宅ストックを活用しながら、高齢期や子育て期も豊かに暮らせる団地のしくみづくりが重要であると考えている。実際に居住者組織と協議しながら地域コミュニティ活動支援のための集会所の改良なども始められている｡今後は居住者とともに､各団地の特性に合ったコミュニティ活動拠点のあり方を探り、さらに周辺住民組織や自治体との連携を深め、豊かな地域づくりをしていくことが求められているのではないだろうか。

身近な生活環境デザイン

柳澤 佐和子

私は人間の生活に深く関わる建物の設計、⑴住宅、住宅地、景観整備計画　⑵木を使った設計、集成材による大規模木造　⑶医療施設の家具、カーテン、サインなどインテリアデザイン分野を手がけてきた。ここで住宅設計、木のデザイン、病院設計について簡単に振り返り、最後に最近完成した山梨の日下部記念病院デザインについて述べたい。

■ **住宅設計**　結婚し子供を育て姑と同居し介護するという経験から「働きやすく家族の絆が強まる住宅」「高齢化に向けて自立を支える同居住宅」などのテーマで、家族構造の変化に対応できる間取り等にも取り組んだ。しかし、一戸の住宅だけが住み良くても周りの生活空間の整備や維持管理がされていなければとの思いから「共有地のある街」に取り組み、住環境の形成の為に外構の統一と調和などいくつかの計画も試みた。

■ **木のデザイン**　昔は、住宅、学校、交流施設などに木造が多かった。私は木の長所を生かし欠点を補いながら、日本の気候風土にあった「健康な生活を支える」という視点で、モデル住宅や大断面集成材を使った木造小学校を手がけ、病院や介護施設のインテリア、特に手に触れるところには暖かみある木を使ってきた。

国産の杉の通直材を使ったシェル構造

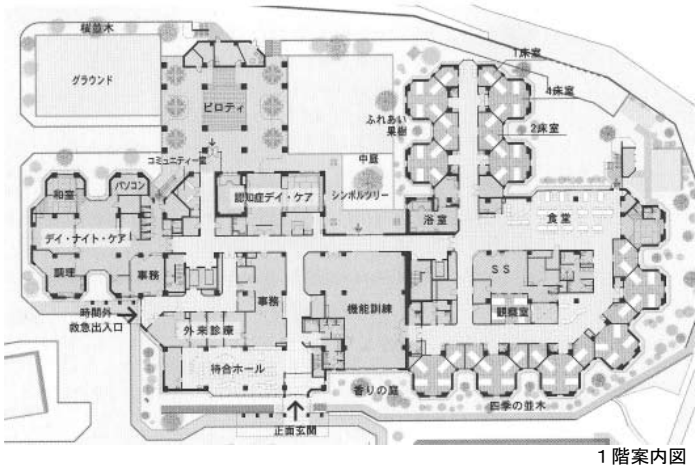
雨天の祭事場　　杉の木センター

サイン計画に使われた地元果物と温かみのあるオリジナルデッサン

日下部記念病院立面図

■ **病院設計**　医療費の削減から年々政策が変わり、病院施設もそれに対応した計画が求められている。介護療養病床の廃止と医療療養の削減など療養病床が 35 万強から 15 万ベッドへ減らされ、訪問看護や在宅医療へとシフトされて来た。愛知県で初めてのホスピスの設計では、平均在院日数 47 日であったが、アメリカで見学した施設では極めて短く、在宅ケアや訪問看護を受けながら最後はホスピスまたは在宅かを選ぶと言われ、手厚い看護で看取られていた。

■ **日下部記念病院**では主としてインテリアを担当した。旧病棟では暗い療養環境で特に畳の 10 人部屋ではプライバシーがまるでない状況にショックを受けた。新病棟では患者・スタッフの交流を持ちながら、自分のテリトリーを確保する為に、個室的多床室を考えた。廊下側の患者も自分の窓から懐かしい景色が見られる。四季を感じさせてくれる地域の花や果物から 9 つのフルーツとテーマカラーを決め、自分のエリアに親しみを持てるよう床やサイン、扉などに使い、病院全体をわかりやすいカラーデザインとした。精神病院内では、仕上材、建具の把手、金物、手摺、家具、カーテンなど全て凶器となり、首吊り、怪我という危険に繋がるため、模型、パネルなどを使いスタッフときめ細かい打ち合わせをして進めた。可能な限り試作し、極力手作り特注とした。在宅へのステップとなるデイケア、ナイトケア、作業療法、救急外来、急性期病棟などにも対応している。さらに様々なイベントの舞台となるデッキがあるピロティ、作業療法の農園や果樹園の中庭、ソフトバレーが出来る運動場、四季の香りの並木がある水路沿い散策庭、屋上の洗濯干場や作業場等々、患者が屋外で過ごす多様な空間を用意した。鈍角の多い多角形の室内空間、変化の多い外観、内外空間が一体となって人に優しい建築が出来たと思っている。



１階案内図

日下部記念病院見学記

北村　和代

柳澤忠・佐和子夫妻の設計された日下部記念病院の見学会が昨年 9 月 24 日、開催されました。この病院は、精神科単科病院で、病床数 282 床、延床面積 10,349.85 ㎡、RC 造地上４階建です。病棟はＡ棟（2005 年 9 月竣工）の療養病棟とＢ棟の急性期病棟及び外来診療、ディ・ケア施設に配置され、今回はＢ棟を見学させていただきました。

■**山梨市は**周囲を山々に囲まれており、笛吹川に面するこの病院の外観は、環境を活かし風景に調和した色彩、ペントハウスには親しみのあるランドマークの三角屋根を設け、地域社会の精神科医療の貢献にふさわしいデザインでした。

病棟は精神科医療におけるコミュニケーションを重視し、かつプライバシー確保の観点から個室的多床室を採用していました。個室と多床室の組合せでスタッフの動線に影響する病室間口も短縮化され、看護環境にも配慮されていました。内部空間は、親しみの持てる地元果物と温かみのあるデザイン、赤や黄色といったビビットな色彩は今までの精神科のインテリアデザインのイメージを変えるものでした。そこには、医療スタッフチームと設計から竣工の瞬間まで論議を重ねて作られて柳澤忠・佐和子夫妻の熱意を隅々まで感じさせるものであり、建築と医療の密接な関係について今後の追跡調査を期待するものです。

■**この病院の設計コンセプト**は財団の経営理念をうけて、単科の精神病院として、地域から心癒される雰囲気を感じてもらい、院内にはいればホスピタリティ溢れる環境を感じさせるようにするというものでした。医療法改正による診療報酬改定の厳しい中、個室型多床室の実現を試み、そして暖かみのあるインテリアデザインの実現をローコストで実現した技術力・デザイン力の高さを感じました。さらに精神科医療の変革に対応した家庭的雰囲気のあるデイ・ケア施設が設置され、ストレス社会の今日精神科医療が特別なものではなくなりつつある中、親しみがあり開放的な雰囲気の外来診療部門等柔軟で先駆的なこの建物は同種病院の建築モデルとなるものです。

■ **医療法改正と医療支援体系の変化**　現在、少子高齢社会を迎えて国の社会保障制度の変革、医療法の改正など病院経営の環境が大きく変化している状況にあります。日下部記念病院建替計画が正式に決定されたのが 2002 年、前年の 01 年に小泉内閣が登場し「聖域なき構造改革」の中、02 年医療制度改革は史上初のマイナス改定は、薬価基準と診療報酬のマイナス改定、さらに本人の一部負担が２割から３割に引上げなど厳しい改正の中進められています。さらに、建設中の 2004 年には精神保健医療福祉の改革ビジョンが掲示され、「入院医療中心から地域生活中心へ」という基本方針の下、国民意識の変革や精神医療体系の再編、地域生活支援体系の再編等がありました。

No.70 Feb. 25, 2007

Union Internationale des Femmes Architectes Japon

UIFA JAPON 事務局
〒102-0083
東京都千代田区麹町２－５－４
第2押田ビル ㈱生活構造研究所内
Phone: 03-5275-7861 Fax: 03-5275-7866
E-mail: uifa@LIQL.CO.JP
発行 2007年2月25日

THE SECRETARIAT OF UIFA JAPON
c/o LABORATORY FOR INNOVATORS
OF QUARITY OF LIFE
DAINI-OSHIDA BLDG.
2-5-4, KOUJIMACHI,CHIYODA-KU
TOKYO, JAPAN 〒102-0083
PHONE :+81-3-5275-7861
FAX :+81-3-5275-7866

■ この指止まれ

小笠原伯爵邸（一部スパニッシュレストラン）見学記

山田 初江

今回の紹介者平井ゆかさん（※1）の言葉「2002年6月、長い眠りから覚め、よみがえったスパニッシュ様式の館・・」に私達は11月30日に訪れた。歩をすすめていくうちに全身が目になっていく。施主は旧小倉藩主、設計は曽禰中條建築事務所、1927年に完成。見事な三者の心組みと高い芸術性と匠の技術が実在していた。外壁の薄茶系の掻き落とし、エメラルドグリーンのスペイン瓦、イスラム風の喫茶室、食堂には唯一現存する大テーブルなど、なにより空間のプロポーションが心地よい、昼食をはさんで地階から屋上・庭まで、長くかかわってこられた平井さんの静かで情熱をこめた説明に夢中になる「生き続ける建築には多くの教示が隠されている」という言葉どうり、得がたい学びを得た約4時間であった。是非 スペイン料理を味わいながら現場に立たれることをお薦めする。

※1 平井ゆか・明治大学大学院博士前期修了、内田祥哉建築研究室
※2 小笠原伯爵邸・tel 3359-5830 要予約（新宿区河田町10-10）
参考図書：INAXreport no167 曽禰達蔵

■ 災害復興見守りチーム定期報告

「法末震災復興祈念 第2回はつがま」

森田 美紀

UIFA JAPON災害復興見守りチームと※プランニングエイドの共催で、1月14日「法末震災復興祈念 はつがま」が開かれた。昨年のはつがまから始まったこのお茶会も4回目。大盛況で84名の参加者があり、お招きした森長岡市長も住民と一緒にお茶を楽しまれ、さいの神に点火してくださった。このお茶会のために長岡のお菓子店で働く集落の次世代の方がクッキーを焼いてくださるなど、徐々に集落と私たちの交流は深まっている。床のしつらえは小川先生・正宗量子氏の掛け軸。亭主は宮本伸子氏。

•• 参加メンバーの一句 ••

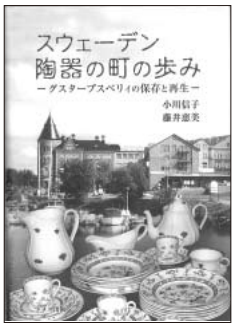
深雪分け 訪なう法末（さと）にて 点て出（いだ）す 一服の茶に 込める思いを〔宮本伸子〕 **お茶会の とりもつ縁が このとしに 法末総出の にぎわいの○（えん）**〔寺本晰子〕 **運び来しわが家の注連飾り（しめかざり）ともに燃ゆ 復興への烽火（のろし）天にとどけと**〔松川淳子〕 **法末で摘んで狩った山の幸 笑顔で包んで宮廷料理**〔林屋雅江〕 **初釜や おとやわらぎの 村人の 華やいだ声 ほっとごっつゆいふぁ**〔渡辺喜代美〕 **髪をあげ 松と椿の香（こう）を受け 振る舞う茶菓は 幾重の想ひ**〔安武敦子〕**法末の次世代作るクッキーと他所（よそ）者たてる茶に縁（えにし）あり**〔石川和代〕 **はつがまや 迎えて思う はや一年 みなの笑顔と 心やさしき**〔森田美紀〕

※NPO法人日本都市計画家協会 中越震災復興プランニングエイド

■ UIFA会員の本－１－

『スゥエーデン 陶器の町の歩み』
—グスターブスベリィの保存と再生—

小川信子＋藤井恵美共著



この本は、まちづくりの手本として紹介したい。

ストックフォルム中心部からバスで1時間ほどの＜グスターブスベリィの保存と再生＞のまちづくりの特筆すべきは、陶器という、いわゆる地域の特性をいかした環境整備を、社会福祉政策の視点に立って行い、「保存しつつ開発をする」現代的課題と取り組んでいることにある。

環境整備の基本である「ソフトウエア（人間にとって快適性・機能性を意識した生活スタイル）とハードウエア（居住・居住環境）の両者が均等に影響し会えること」を実現しようとしているのである。

小川信子と藤井恵美は、実に優れた保存再生のまちづくりの本を、時節に会って、日本に紹介してくれた。いま、日本のさまざまな地域で起こっている崩壊寸前の地域の、大きな参考書となろう。たくさんの写真は資料館にいる臨場感もあって楽しい。
必読図書ＮＯ１。（渡邉喜代美）

■ UIFA会員の本－２－

『アルバムの家』

女性建築技術者の会著

UIFA会員を含む女性建築家達が自分の子供時代の家について書いたオムニバス形式の本。後に建築家となる少女達の目を通して、日本が豊かになっていく時代の暮らしや遊びと住空間が綴られる。各々が描き起こした図面によって、住空間が暮らしや時代と密接に関わっていることがビジュアルに見えてくる。また、著者達を撮った当時の写真はタイムマシンの鍵となり、筆者は姉と自分達の子供時代の話になった。そして、多くの思い出が空間体験と結びついていることを発見した。本書には様々なタイプの住宅が出てくるが、子供時代に体験した空間が建築を志すきっかけとなったのは皆同じなのがまた興味深い。更に「アルバムの家」を改修、建て替え、或いは取り壊した時のエピソードには、自分たちの豊かな空間体験を次世代に渡すべく葛藤している建築家達の姿が見える。家族等、建築の専門家でない人と一緒に読める建築の本として、また自分の原点を確認する本としてお勧めである。（石川和代 昭和44年生まれ）

役員会報告

第8回（11月21日）第39回海外交流の会最終確認。第40回海外交流の会の日程、内容決定。災害復興見守りチーム・都市計画家協会共催シンポジウム、第38回海外交流の会の総括。各行事開催後にまとめを作ることとする。学校トイレ改善の活動へのサポートについて検討。
第9回(12月20日)第39回海外交流の会について来場者100名超の盛況だった等の報告があった。災害復興見守りチーム「はつがま」実施内容の説明。総務と広報の編集連携意見交換会の日程調整。
第10回（1月18日）UIFA国際大会は10月1日から1週間程度の予定。詳細は後日。ニューズレター70号企画の報告、学校トイレの要望書は広報で検討中。法末「はつがま」報告。第40回海外交流の会最終確認。

編集後記

立派なお仕事に圧倒される先輩方も建物好きな女の子だったと思うと親近感が湧きます（石川）
2月26日から2週間、深川で交通社会実験を実施。地域は変われるか（須永）
“お茶目さん”達が過ごした住居体験が「アルバムの家」の中で再現。（中野）
映画「不都合な真実」をみて「世界の半分が飢えるのはなぜ？－ジグレール教授がわが子に語る飢餓の真実－」を再読。（渡邉）
暖冬におびえ、拍車のかかる街並みの変貌に憂えるなか、会員の「優しく・鋭い目線と活動」に誇らしさを覚える（編集長 井出）